第１７１号

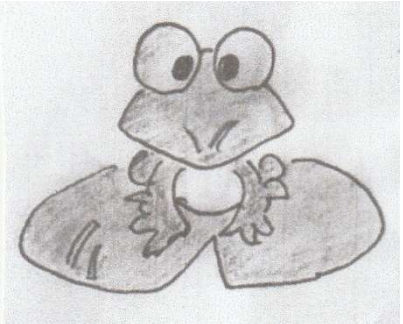
芥川だより

発行日＊２０２１年４月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
印刷・発行 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

生きていればいい…



悟りきったのか、諦めた末の言葉か？　多くの客を相手にしてきたが「生きてりゃいい」と言い切った人は彼女だけだった。彼女は私と同年配である。遠く姫路から幾度も来店された。高校の同級生が定期的に集まる女子会の時に寄り道されていたと記憶する。

彼女の話では、大事に育て教師になった娘が突然家に来て「私、結婚したし…」という。何の便りもよこさなかった娘が親に一言も相談することもなく結婚したという。「もう、腹が立って仕方がなかったが、もう諦めて生きてりゃいいじゃないか、と悟ったのよ」

実は我が家でも、末娘が高一の時に家出をし、手を尽くして探したが見つけられず、途方に暮れていた。何が悪かったんかと自問するが分からない。時が経つに従い腹立ちさも薄れかけた頃、風の便りで生きているらしいと聞いた。生きておれば上等だ、好きにやったらいい。どうせ探し出しても、また逃げるんだろうからと思い探すのを諦めた。

家出から 15 年余りたったある日、末娘から私にメールがあった。突然のメールに驚いた。店を開店したいから相談したいという。家内と相談して、家で相談しようかと誘うと簡単に承諾した。約束した時間に駅に迎えに行くと娘はいた。ドタキャンがあるかもしれないと内心心配していたが杞憂だった。

長い年月が娘からとげとげしさを削り大人の話が出来るようにさせてくれていた。大道芸人を独りでやり教室もやってそれなりに稼いでいる。コロナで大変な目に会ったので副業を考えたらしい。賃貸物件も探し税理士さんとも相談し開業に向けて動いている。私は「歳やし金もないし力になれんけどビラ配りくらいはしたる。でもな、商売をして３年も続くのは数パーセントや、閉店の時の事を考えとかなあかん。やると決めたんなら、お前の人生や、思い切ってやれ」。二度と会うことはないだろうと諦めていた娘と会うことが出来、少しでも手伝うことで家族の思い出を残せると考えればそれだけで十分だ。やっぱり生きていればいいことがある。

死をめぐるあれやこれ（７７）

石川　吾郎

国民を貧しくするこの国の仕組み ①

この国では、一般の国民を貧しくする仕組みがいくつも仕掛けられている。その一つは消費税だ。消費税を喜ぶ人は誰もいないだろうが、我々は慣れ切ってしまっていないか。◆いうまでもなく我々が消費すると必ず払わなければならない。これは消費に対する罰則に他ならず、ものの売れないこのデフレの時期に消費に大ブレーキをかける。しかも消費税は貧しいものほど重くのしかかる残酷なもの。しかも現実には福祉のためでなく法人税軽減の補填の役割をしている。だがこれに加えて、実は非正規雇用が急増し、どれほど望んでも正規雇用が困難な原因は、この消費税のせいでもある。だがこのことは一般に知られていない。◆企業の立場からすると正規雇用の人件費には社会保険料の負担が必ず付き（これは人を雇うと罰金がつくということ）、これに利益を足したものに消費税がかかるが、非正規や外注にすると、これには消費税はかからないし社会保険料の負担もなくなる。つまりどんな企業でも正規社員は削らないといけない。企業はどんな良心があろうと民主的と言われる会社でも、経営のため従業員は極力非正規にする圧力になる。これは今の制度下で経営には必須になっている。◆この結果、この国の国民の多くは不安定な身分の非正規雇用から抜け

出せない。そして労働力の流動化をいっそう促進する。この大きな原因が消費税なのだ。◆給与を上げて国民の生活を豊かにするためには、消費税を廃止して社会保険料を減免するように制度を変える、そのような政策が必要なのだ。これは現在の政府では望むべくもない。今年予定される政権選択選挙では、ぜひこの点を考えよう。

芥川だより一七一号　目次

		ページ
巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム77	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳85	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談34	祖蔵哲	3
大峰奥駆道41	下村嘉明	7
大人の今昔物語78	石川吾郎	8
新型コロナウイルス愚考（12）	明石幸次郎	9
オクラの山たより55	因了生	10
隠された歴史30	満田正賢	13
道をゆく24	成瀬和之	15
マルクスから学ぶ（3）	成瀬和之	16
編集後記	ＳＫ生	17
ふみの道草33	山椒魚	18
俳句	土田裕	18
	影山武司	18

素老人☆よもだ帳（８５）

坂本　一光

◆ふるさとの山はとことん泣けと言う

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

『一握の砂』にあるこの歌は、啄木の『明治四十三年歌稿ノート』には、

故郷の山に向ひていふ事なし故郷の山は有りがたきかな

と記されている。ふるさとの山は古来詩歌の永遠のテーマである。山が見える風景の中で育った者は、必ずと言っていいと思うが、ふるさとの山にふるさとそのものを見るようになるだろう。

素老人のふるさとの山は、障子山という標高八百メートルなにがしかの山である。帰省してバスを降り、畑の中の道を急ぎ登りながらふと見上げたとき、それまで目に入っていなかった山が突然のように目の前に飛びんできたことがある。以来、あの山を見てはじめて、故郷に帰ってきたという実感が湧くようになった。

ふるさとの山の意味は生まれ育った地によって異なるだろう。見渡す限り家並みばかりで山など見えもしない都会で育った人には、山はどんな意味を持つだろう。そんなことを考えていたとき、そこに登場する人たちにとって、「ボタ山」が、素老人が思うような甘い意味で、ふるさとの山になることはないだろうと思う写真集を数十年ぶりに見た。土門拳『筑豊のこどもたち』（築地書館、一九七七年）がそれである。旧版（パトリア書店）はその十八年前。そこに土門の「著者のことば」がこうある。

「日本各地の炭田地帯には、いま、炭鉱離職者の大集団がいる。貧窮のどん底にありながらなぜ、かれらが暴動を起こさないのか不思議なくらいだった。それがマケ犬の忍従なのか、いわゆる日本人のネバリ強さなのか、ぼくにはわからない。長い圧迫の歴史が、かれらのエネルギーをどこかに閉じこめてしまったかに見える。何ら施策のほどこされないまま、かれらは、一九五九年の年の瀬をむかえた。二十万を超える飢餓人口がボタ山の裾野に放棄されたままだった。ぼくは、その暮の半月間、北九州筑豊の炭田地帯にもぐり込んで、これらの写真を撮ってきた。失意のどん底の失業者と、そのこどもたちを・・・・・。写真集にも、いろんな形式があっていいはずだ。ぼくは、この写真集だけは美しいグラビア用紙でではなく、ザラ紙で作りたかった。丸めて手にもてる、そんな親しみを、見る人々に伝えたかった。昔ふうにいうならば、いわば、《尻っぱしょりの》写真集にすることが一番ふさわしいように思えたのだ。」

新版には野間宏のまえがき「日本汚染列島と重なりあう日本の黒い山」がある。

「…ボタ山のボタ（燃えない石）は、今では風化し、拾いあげると手のなかで、すぐにもくだけるほどのものになってしまっている。そのボタのなかの白い部分が、高層建築の外枠のところにつかわれる建築材になるのである。…ボタ山は次第にけずりとられ、その裾、横腹のところを食い破られ、次第に元の跡形を失っていくといってよいだろう。

そして私はこの少しばかりもとの形を残しているボタ山の麓のところにつっ立って、現代文明の危機という問題について考えていた。…

一九七三年秋に日本をおそった石油危機によって、日本経済はその高度成長期の終末を迎えることとなる。石炭産業を犠牲にした重油、石油、原子力その他のエネルギー源による日本の大重工業は、もはや、その高度成長を支える一切の条件を失っている。石炭産業を犠牲にした大重工業政策は、水俣病を生み、大気汚染をすすめ、瀬戸内海を死の海にし、日本を汚染列島にしたのである。筑豊の一切を奪い取ったものがこれである。

土門拳のカメラは、その筑豊のただなかにはいり、その一切を収めている。私は、一九六〇年に出された、この『土門拳写真集　筑豊の子どもたち』のまえがきのなかに、次のように書いた。

『…私を圧倒した印象は、何よりも、やせはてて内から伸びる力を失い、皮膚が肉をはなれて存在するかと見えるような、子

供たちの印象だったが、子供たちの父親は絶望にとりつかれて子供と妻や母親をすててどこかへ姿を消していたのである。このような子供を取巻いているきびしい現実は土門拳のカメラによってとらえられ、私たちを先ずその現実そのもののなかに導いて行く。子供の笑い、遊び、勉強、けんか、など、子供たちのすぐ足下にひらいている大きな黒い穴がいまの炭鉱である。…破れてなかみのなくなった畳が畳であり、菜のない食事が食事であり、玩具のない遊戯が遊戯である。しかし子供たちはそこで月に向って伸び、笑いをはじかせている。すでに労働を知り、労働生活の何たるかを知っている子供たちは、限りなく暗い顔と限りなく明るい顔とを持っている。二つの閉じた眼から落ちる涙の糸は無心のようでありながら、その辺りに積みあげられている重い黒い石を下から引き上げているかのようである。ボタ山に袋をかかえ、すわりこむ子供は、自分にせまるものの足音をきいている。それは大人の生活に向き合った子供の顔である。紙芝居を見にあつまる子供たちの顔は、かげっていて、そこには暗い神経がつき出ている。子供たちは大勢が一ところにあつまるとき、どうしてこのように暗い顔になるのだろうか。犬の耳がつき出ている。たっぷりある髪の下の考え込んでいる顔。ひらいた親指と小指の間で、かがめられた指たちは、彼女の内にあるものを明らかにしている。かけた茶碗と空の酒瓶、醤油瓶、しおれた菜っぱ。ガラスは破れ床の下からつき出る二本の足。炭住に住み、いまにも追い出されようとする人たちの生活にそれらはつながり、しかもその心を何よりもつよく表現している。…』

日本のエネルギー問題の将来は困難にみちている。誰がこの困難を早くとらえ、その解決に全力を投じて、すすみ出ているだろうか。

筑豊を犠牲にした人たちにその力があるわけはない。」（ゴチは素老人）

この最後の言葉は、この国の今日の現状にそのままあてはまる言葉だろう。

沖縄を犠牲にした人たちに…

ヒロシマを犠牲にした人たちに…

ナガサキを犠牲にした人たちに…

３・１１を犠牲にした人たちに…

フクシマを犠牲にした人たちに…

つまりは、

あらゆる犠牲を強制した人たちに…

気が付けば、この国では、何一つ困難な問題が解決しないままに、すべてが水の流れるままに押しやられ忘れ去られていった。立て続けに起こった地震災害、豪雨災害、原発事故、新型コロナウイルス感染、等々への無策ぶり。また、権力者が身内や同盟国やお友だちを思いやり、それを見て彼らを取巻く政治家・司法家・官僚たちがここぞとばかりに忖度し忠誠を誓う政治のありよう。現状に対して大いなる不満を抱えながら、国民が必ずしも腹の底からの怒りを爆発させないとき、一貫して無能で危険な政治を行うこの国はどこに漂流するのだろう。

何か大きな、不幸な出来事があったとき、人は誰でも、当たり前のように思えたあの日常こそが幸せであった、と思うものではある。しかしまた、あの日常が手放しで戻るに値するかどうかは別の問題であることも確かだろう。覆水盆に返らず、しかし盆に返ればそれでいいのか。

「すべてが変わるように見えても、実は何も変わらない」という呪文を、この国に生きる者たちはそのDNAに刷り込まれている、とでも言うのか。

（かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人）

哲学爺いの時事放談（３５）

祖蔵　哲

ナショナリズムの哲学

案の定、緊急事態宣言は3月２１日に解除された。そして２５日にオリンピック聖火リレーが復興五輪の象徴として福島からスタートした。非常にわかりやすい政治が相変わらず続いている。復興は未だ進んでいないし、その進行を妨げたのは東京オリンピック建設ラッシュである。政治がオリンピックを利用するという構図は前号でもその歴史的背景を説明したが、１９３６年ヒトラー・ナチス政権でのベルリンオリンピックはその代表例だ。五輪大会委員長のヒトラーは政治プロパガンダとしてギリシャから聖火をリレーするという現在の方式を初めて導入した。その際ドイツ軍は聖火を護衛するという名目で通過国の侵略計画を検討していたという逸話もある。政権政府による「上からのナショナリズム」の扇動によって国民は「下からのナショナリズム」の「疑似一体感・満足感」を得る。国家の政治不信、失策による国民の不満を回避する手段、これが「オリンピックの真実」である。さて、このような自己都合優先の政治決断にコロナは容赦なく反撃を食らわした。一旦収束の兆しが見えた感染者数は反転してきているのである。

世界的にも新型コロナウィルスは依然猛威を振るっている。世界全体での感染者は１億３千万人、死者数３００万人をもうすぐ超える勢いである。欧州では感染力の強い変異ウイルスが広がり「第４波」の可能性もあり各国はロックダウンの強化に踏み切っている。人類のワクチン攻撃に対して新型コロナは変異種で対抗してきている。世界で一番感染者の多い国はアメリカである。感染者は３千万人、死者は５０万人をすでに超えている。この数は第二次世界大戦の米軍の死者４０．５万人を抜き、米国史上最大の犠牲

者を出した南北戦争の６２万人に迫っている。建国以来最大の危機である。しかし、第二次世界大戦での死者は日本が３００万人、中国、ソ連は各２千万人以上であり戦争での犠牲者は比較にならないほど悲惨であったが。

国家の名誉をかけてのスポーツ競争オリンピックと同じように、国家間の戦争も「ナショナリズム」の戦いである。前号は近代西欧社会が生み出した私的「スポーツ」が公共化され、それが国家資本や商業主義と結びつくことによってオリンピックという政治的ショーマンシップが生まれたということを説明した。そして本来、世界平和の祭典としてのオリンピックは国家としての競争でなく参加選手個人の卓越性の競争であったが、その方向は世界性「インターナショナル」を指向するのではなく、内向きの「ナショナリズム」に向かうようになった。確かにオリンピック観戦での自国の選手が活躍し、表彰台で国旗が掲揚されると単純に気持ちが高揚する。競技を見ている自分の優越性が褒められているわけでもないし、ましてその選手ともなんの面識もない。何が優越しているのか具体的な対象が見当たらない。唯一の残るのは目に見えない、触れることもできない日本国という「国家」である。一体、国家というものは何処にあるのか。そんな不明瞭なものを対象とするのが「ナショナリズム」である。今号は「ナショナリズム」を哲学する。

（1）「国民」とは

オリンピックで「自国家」の選手の勝利に高揚感を感じるのは「同国民」としての一体感を見出すからであろう。その「国民」とはそもそも何か。

国民とは『国家を構成する者のことで，その国の国籍を有する者がそれにあたる。』とされており、日本国憲法では「国籍法」による要件が規定されている。しかし、人はその国に生まれたかといって自動的にその国民になるのではない。国際化時代にあり、両親が同じ国同士とは限らないし、また生まれた国も両親の自国外の場合も多々ある。つまり個人は両親を通じて国家とつながっているのではなく、その国の「国籍法」を介して直接的に国家とつながっているのである。このような「国民」は、18世紀以降のヨーロッパにおいて市民革命を経て「国民国家」という概念が生まれたことに対応して形成された概念である。

出生による国籍の取得については、出生地の国籍を子に与える立法、すなわち自国で生まれた子に自国の国籍の取得を認める「出生地主義」と、親の血統と同じ国籍を子に与える立法、すなわち自国民から生まれた子に自国の国籍の取得を認める「血統主義」とがある。フランスやアメリカなどは「出生地主義」が原則であるのに対し、日本をはじめ、韓国やドイツなどは「血統主義」が原則である。この対立は「国民国家」成立の歴史的形成過程を反映している。フランスに代表される「出生地主義」は国家を「国民の絆を契約的に捉える市民的領土国家」ととらえているし、フランス革命にみられるような社会の構成員に自覚的な意志に基づいて形成された「主意主義的国家」である。一方でドイツなどは言語、郷土感情、民間伝承など個人に意志以前に存在するさまざまの共同体的つながりにもとづく「民族的国民血縁国家」だといえる。

（2）「国家」とは

「国民国家」という概念を語る前に、「国家」とは何かを知る必要がある。国家はその「形式」と「実体」に分けられる概念である。「形式」としての国家とは「部分と全体」という哲学的概念、政治制度の集合体、弾圧や圧政の手段、権威の象徴など多様な文脈で論じられる対象である。このような意味の混合は国家をどのように捉えるかという着眼点においてさまざまな立場を採りうる。例えば哲学倫理的、機能的、そして組織的な観点を置くことができる。

哲学者ヘーゲルの国家理論では倫理的な観点から国家を論じており、家族、市民社会、そして国家に大別している。家族は限定的な利他主義、市民社会は普遍的な利己主義、そして国家を普遍的な利他主義の領域であると位置づけていた。つまり国家は家族のような利他性を備えていながらも市民社会の普遍性を持った社会的な存在として考えられるのである。ヘーゲルは国家を「家族―共同体」が止揚したものとしてとらえていた。これに対して、Ｈ・アーレントは家族を私的領域、国家を政治の場としての公共領域としてとらえ、消費資本社会の出現によって公共領域が私的領域を侵食しているという近現代の危機的状況をあぶりだした。一方、機能の観点から見れば、国家は社会に対して担う役割から捉えることができる。国家の中心的な機能とは社会秩序を継続的に維持することであり、社会的安定を担保することである。組織的な観点に転じれば、国家とは広義において政府の組織であり、市民社会とは区別される公的制度である。つまり立法、行政、司法の三権である。そして国家が持つ行政権には支配の道具としての警察、軍隊も備も含まれる。社会学者ウェーバーは法に従わせることを確実なものとする能力として国家は「正当化された暴力」を独占しなければならないと言っている。そして、国家は権威としての「主権」を備えており、それは社会における全ての集団よりも上位に位置する絶対的権力として行使されるものであり、その表現として「社会契約論」のトマス・ホッブズは国家を海の怪物であるリヴァイアサンとして示している。

実体としての国家は「ステイト」として本来は「国王が所有する財産」を意味していた。それは土地や収穫物、さらに財産としての人間（奴隷）などである。現在の国家は領土的な集団として実体存在である。国家は国境によって地理的に区別されることで、国際社会において国家として承認される概念の具体化である。

（3）主権の変遷：フランス革命「国民主権国家」成立

「国家」が備える形式的要件のうちの「主権」とは、元々は西欧の政治において「至高性」を指す用語・概念で、フランス国王の権力が、一方ではローマ皇帝や教皇に対し、他方で封建領主に対して、独立して最高の存在であることを示すための用語として登場した。それまでの歴史において地域に共同体や部族を領域的に支配する原理としての「主権」はローマ帝国での「法」や神聖ローマ帝国での「キリスト教」であった。１５１７年、ルターによって始まった宗教改革から、ほぼ百年後に起こった三十年戦争は、そのキリスト教内での権威を争う宗教戦争であった。ドイツ内の新旧両派の宗教対立が、西ヨーロッパの新教国、旧教国がそれぞれ介入したことによって大規模な国際紛争となった。そして、フランスが旧教支援から途中で新教支援に転換したように、単なる宗教戦争にとどまらず、ヨーロッパの神聖ローマ皇帝と領邦君主の覇権を巡る国際的な戦争へと変質していった。

戦争は長期化、悲惨を極めた結果１６４８年、各国は戦争終結のために条約を締結した。６６か国が署名しウェストファリア会議で成立した三十年戦争の講和条約は世界最初の近代的な国際条約とされている。この枠組みによって、プロテスタントとローマ・カトリック教会が世俗的には対等の立場となり、政治的にはローマ・カトリック教会によって権威付けられた神聖ローマ帝国の各領邦に主権が認められたことで、中世以来の超領域的な存在としての神聖ローマ帝国の影響力は薄れた。宗教は国家に従属し、神聖ローマ皇帝の立法権・条約権は帝国議会に拘束され、皇帝に代わって世俗的な国家がそれぞれの領域に主権を及ぼし、統治権と外交権を行使することとなった。そのことにより、ヴェストファーレン体制は、しばしば「主権国家体制」とも称される。すなわち、国家における領土権、領土内の法的主権およびと主権国家による相互内政不可侵の原理が確立され、近代外交および現代国際法の根本原則が確立されたことである。

すでにルネサンスより沸き起こっていた人間解放の思想は、この宗教改革を経て「主権」概念の変化を起こさせた。トマス・ホッブズによって近代化、個別化され、全ての正式の国家において特定の個人または人々の体は至高かつ絶対の権威を保有すると法で布告すべきであるし、この権威を分けることは国家の統一性を本質上破壊するものであるとされる。この思想はその後１６８８年の名誉革命に影響をあたえ「権利の章典」など国王権力の制限を与えることを可能にした。さらに、ロックやルソーらの社会契約論によって国民主権・人民主権の教義が生まれ、１７７６年のアメリカ合衆国独立(やフランス革命にも影響を与えた。

１７８９年にフランスで勃発したフランス革命は、ブルボン絶対王政を倒した市民革命である。封建的特権の廃止、人権宣言、王政廃止、憲法制定などを実現、共和政を実現した。王政とそれを支えた貴族階級に代わりブルジョワ階級が権力をにぎったが、革命の過程で急進派と穏健派が分裂、ロベスピエールによる恐怖政治が行われ、周辺の君主制国家からの介入もあって革命政権は動揺し、１７９９年にナポレオンの軍事独裁政府が成立した。革命は長期にわたり複雑な経緯を経たが、基本的にはアメリカ独立革命・並行して展開されたイギリスの産業革命とともに市民社会への移行、つまり近代の出発点としての重要な歴史的画期となった。ナポレオンは自らを皇帝と名乗りフランスの支配地域を拡大しようと革命の輸出を試みた。従来の国王軍や傭兵しか持たない王権国家と異なりナポレオンの国民国家は全国民の総動員で構成されており、また人間を解放するという「自由、平等、博愛」といった普遍的な国家理念はその士気も非常に高かった。フランスでは、フランス革命を中心に国民意識が統一されていくことになる。実際に行われたのは、フランス革命の革命歌である「ラ・マルセイエーズ」を国歌にしたことや、革命１００年祭りとしてパリ万博をなどであり、ドイツとの戦争体験や敵国としての認識を用いた教育も行われた。つまりは国民が共通して持つ歴史を掘り起こし、明確化し、印象づけることで国民意識を統一していったのである。

フランスの場合は、「国家が決めた理念について、自分から選択した人々が国民である」という形で「われわれ意識」が作られた。そのため、フランスのナショナリズムは、次に説明するドイツの血統主義に比べて、開放的、啓蒙主義であった。これは先ほど説明した「国籍」の「出生地主義」と「血縁主義」の違いの歴史的説明でもある。

フランスにはとくに、自由・平等・友愛を謳ったフランス革命の思想が近代市民社会の理念を形づくったとの自負から、「共和国の普遍的価値」の共同幻想のもとに国民を統一しようとする意識が強い。その「普遍的価値」の柱の一つに「ライシテ原理（世俗主義。私的領域における宗教の自由と公的領域における脱宗教化）」が据えられている。イスラム教徒のブルカ着用を禁止も一例である。・

（4）ナショナリズムによる「国民国家」

隣国ドイツは歴史上「神聖ローマ帝国」の支配のもとに様々な領邦国家が集合していただけで個々の関係性は希薄であった。そのドイツの最有力諸邦の一つであったプロイセンは、ナポレオン戦争の一環である１８０６年のイエナの戦いで大敗、国土の大半を失い、事実上、ナポレオンの支配下に組み込まれた。それによってフランス革命の理念もドイツに影響を与えるようになり、また、当時多くの領邦国家に分裂していたドイツ人の民族的自立と国民国家としての統一に目覚めた。

哲学者フィヒテは１８０７年末から翌年にかけて、まだフランス兵の駐留するベルリンで連続講演を行った。それは「ドイツ国民に告ぐ！」と題して、今こそ“国民的品性の涵養”が必要であると説き、「本来のドイツ人に立ち返ろう」と訴えた。いまだドイツは統一されていなかったのである。１８６２年、プロイセン首相となったビスマルクは「鉄血政策」といわれる富国強兵策を進め、デンマーク戦争、普墺戦争と次々と戦争での勝利をかさね、あらたにナポレオン３世のフランス帝国を普仏戦争で破り、１８７１年１月８日のドイツ帝国の成立によってドイツ統一を実現することとなる。

１９世紀末のドイツ統一によって出発したこの国家は、地方分権が発達した連邦国家という形態をとった。各地方にバラバラに乱立していた政治勢力を一つの国家として統合していく際に持ち出されたのが、「ドイツ民族の一体性」という論理であった。つまり、ドイツの国家形成の過程においては、ドイツ語を話すという「ドイツ民族」というものが先にあり、それらが一つにまとまる手段として「国家」が用いられるということが行われた。フランスにおいて「国民」は新たに「つくられる」ものだと捉えられていたのとは異なり、ドイツにおいては「民族」はもともと「あるもの」であって、新たに「つくられる」ものだとは考えられていなかったのである。

この「民族」という作られた概念は、ドイツ語で volk（フォルク）と呼ばれ、固有の文化や言語、歴史、さらに言うと「血」を共有しているとされる人びとの集団を意味する。これは、フランスの「ナシオン」という概念が、普遍性に向かって作り上げられていく政治共同体としての側面が強いこととは対称的である。フランスにおいては、地域文化・土着文化・過去の歴史を打ち出すことは国家分裂主義を意味するが、ドイツにおいては、まったく反対に、国家の統合のための論理としてそれらは持ち出される。この対称的なナショナリズムは、先進国と後進国のナショナリズムのあり方として一般的にみられるものであるといわれる。すなわち植民地主義の先進国は、「普遍性」を強調するフランス型のナショナリズムを打ち出し、一方、攻め込まれる側の後進国は「固有の文化」を強調する。このように「国家」も「民族」も統合のために要請され「想像されるもの」形式であり実体はではない。

（5）そしてナショナリズム

「ナショナリズム」とは、一つの文化的共同体が、集団としての統一と発展や独立をめざす思想・運動である。国民主義・国家主義・民族主義などと訳され、「愛国心」という意味で使われることもある。我々が習った日本の高校教科書では、先ほど説明した１９世紀前半のヨーロッパに展開した「国民国家」形成期のナショナリズムを「国民主義」と訳し、そしてその後２０世紀に入りアジア、アフリカなどの西欧の植民地に起きたナショナリズムを「民族主義」と訳している。しかし、どちらも原語は「ナショナリズム」であり、ナショナリズムは近代世界システムでの「自己同一性」証明の基本原理である。しかし「国家」も「国民」「民族」も統合のために要請され「想像されるもの」であり、それが形式的に領土において固定されているだけであり、実体は流動的である。

本来のナショナリズムの方向はフランス革命でみられるように「自由、平等、博愛」という「普遍性」に向かう内的な統一であったが、それが「血縁や民族」といった「特殊性」に向かう排外的統一の運動に変化していった。西欧列強の植民地で起きた独立運動はいわば「西欧グローバリズム化」に対する「ナショナリズム」でもあった。これは現代のグローバル経済社会で、新しい形の「ナショナリズム」自国回帰が「反グローバリズム」と浮上してきているのと同じ現象である。本来のグローバリズム（地球主義）は国家や地域というナショナリズムに基づいた単位の集まりである世界を、普遍的な価値や規範で均一化しようという考え方であるが、現在では主に新自由主義者による国境なき経済活動を表している言葉になっている。国境を取り払って移民を大量に受け入れたことにより様々な弊害が起きているが、一方でアメリカの「アメリカ・ファースト」やイギリスの「ブレグジット」などのような、ナショナリズム回帰も始まっている。

「ナショナリズム」の対義語としては、「グローバリズム」の他に「コスモポリタニズム」「インターナショナリズム」「ユニバーサリズム」などがある。「コスモポリタニズム」とは「世界主義」と訳される言葉で、アレクサンドロス大王の東方遠征によってギリシャ文化とオリエント文化が融合したヘレニズム時代に発生したものである。小さな都市国家（ポリス）ではなく、一つの共同体としての「世界」にすべての人間が平等な立場で所属することを目指した国際都市（コスモポリス）

になろうという考え方である。

国際主義と訳される「インターナショナリズム」は、各国が独立した主権国家として存在しながらも、相互の共存共栄と世界平和を実現しようとする考え方である。インターは「間・相互」という意味をもつ接頭辞で、ナショナリズムの頭につくことにより、共同体や国家の関係性を模索する意味合いを形成している。インターナショナルは自国の独立性を尊重しながらも、他国の独立性を損なうことなくよりよい関係性を相互的に築いていこうとすることで、世界を均一化する「グローバリズム」や全世界を自国と考える「コスモポリタニズム」とは異なる。しかし、この「関係性」が政治的傾向を帯びてくると同一主義が協調され歴史的にはマイナスイメージが伴うようになってきた。

「普遍主義」と訳される「ユニバーサリズム」は、普遍的という意味のユニバーサルが元になった言葉で、個別の違いよりそれぞれに共通する事柄を尊重しようとする考え方である。全人類に共通する普遍性を重んじる立場の「ユニバーサリズム」は、歴史的にはフランス革命での主要理念であったが、「普遍とは何か」や「世界共通理念」の存在をめぐっては議論が進まず現在も課題を持ち越している。

今月はやたら言葉の定義にこだわり紙面を費やしてしまった。で結局オリンピックのナショナリズムはどうなの、悪いの、良いのという議論である。オリンピックに限らず国際的スポーツには「ナショナリズム」が付きまとう。サッカーにおける「フーリガン」現象や差別発言は「排他的ナショナリズム」との関係が深い。一方、支配や強制からの解放を目的とする「排外的ナショナリズム」は現在でも普遍的価値である自由や独立を求める運動の原動力となっている。アラブの春以来の中東の独立運動、アジアでの少数民族問題、さらに西欧においても英国のアイルランド、スコットランド問題、ソ連解体後の東欧諸国の独立運動などである。

「普遍とはなにか」「全体は部分の集合か」「理念とはなにか」「形式と実体」など哲学的課題と「ナショナリズム」の問題は共通する。だから依然として解決はしない。「スッキリスカッとする答え」はない。常に考え続けて生きることこそが重要である。それが「哲学する」ということである。

大峯奥駈道（41）

下村　嘉明

やはりと言ってはなんだが、長く服用し続けているステロイドの副作用の罠から逃れることは難しそうだ。アスペルギルス抗体の数値が高くなり始めた。これはカビが体内に増殖していることを示している。免疫がある人なら無数に飛んでる菌類を吸っても発病しないのだが、ステロイドによって免疫力が落ちていると体内に入り込んでしまう場合があるらしい。私の場合は、九年前に入院時からカビの数値が気になると担当医から言われていた。この時の状態は、ステロイドをマックス60ミリグラム毎日服用していて間質性肺炎も併発し、おまけにカビの数値も高かった。もちろん他の数値も異常だったのだが、カビという意外なものに対して注意を持たなかった。

以後、三ヶ月に一度の定期検査でもカビの数値はそれなりに落ち着いていたのだが、先日の健診では高くなっていて、一週間後の再検査では更に高くなっていた。担当医も放置するわけにはいきません。「原因を探す為に検査をしましょう。まずはCTで胸部と副鼻腔炎を検査し、耳鼻咽喉科で診察を受け、更にアスペルギルス抗体の検査（保険対象外）、胃カメラによる検査をやりましょう。それでも原因が見つからない時は、アスペルギルス抗体を抑える薬を投与します」。

CT検査でも異常が見つからず、耳鼻咽喉科でも異常なく、胃カメラを来週することになった。私の感覚では、体調は極めて良好で何も異常は感じない。検査ミスではと疑いたくなるが、検査の数値は非情だから体内のどこかでカビが巣を作っているのだろう。無症状で検査数値が異常を示し続けると精神的に不安になる。しかし、医学的に解明できていない事は多くあるのだから、そう悲観的に考える必要もない。いずれ何処かに異常が現れるはずだから。七十才を迎える今年は何かドラマチックな展開が予想される。

21キロを三時間でジョギングを毎日続けるのは、やはり無理だと分かった。足裏が痛くなるから14キロと7キロを二度に分けてしている。すると効果はてきめんだ。体重も標準になり体脂肪も落ちた。先週、いつものように宝塚駅から六甲山最高峰を登ったが、体重が減ったためか楽に速く登れた。自己新記録であった。いちばん感じたのは水分をあまり飲まなくなったことである。ジョギングの時も水をがぶがぶ飲まなくなっていた。汗も以前のように大量に出なくなった。

よくは分からないが、確かに身体が変化している。少しジョギングの距離を延ばすことでこんなに身体が軽く健康になってくるとは不思議だが、カビの菌類は増殖している、不可解な思いでいる。

大人の今昔物語（７８）

石川　吾郎

今回は平安末期の武士階級の勃興とその組織化のみごとさを述べる逸話です。時代の激動期の到来を感じさせる話です。教科書に出ない度は一／五。

平致経（むねつね）、明尊僧正を送る話（巻第二三　第十四）

今は昔、宇治殿（藤原頼通）のご隆盛な時代であった。三井寺の明尊僧正が祈祷のため宮廷に宿直であったところに、灯りが点灯されなかった。しばらくすると、何のためとも告げられず、急にこの僧正を三井寺に遣わし、また夜の内にお戻しをするという下命が出た。

厩の、物に驚いたり興奮したりしない落ち着いた確かな馬に、移し鞍というものを置き、それを引き連れて、家来たちを招集し「この道中の供をする者はだれかいるか」と頼通の殿が尋ねられると、そこに左衛門尉（さえもんのじょう）平致経が進み出て「致経がおります」と申し上げる。頼通の殿「よし」と仰せられ、当時はこの僧正はまだ一僧都であったので「この僧都、今宵三井寺に出かけ、そのまますぐに戻り、夜のうちにここにもどるということを、確実に実行せよ」と仰せられる。これを聞いて致経、普段からその詰め所に弓と矢を入れるヤナグイを立てかけ、藁沓（わらくつ）というものを一足、畳の下に隠して下人を一人置いていたので、これを見る人は「心細く頼りない奴だ」と思ったが、この命令を承ると致経はたちまち袴の裾を高く括り上げ、脇を探って準備していた藁沓を取りだして履き、ヤナグイを背負って、引き出してきた馬の横に立つと、出てきた僧都が問う「それは誰か」と。「致経」と答える。

僧都「三井寺に行こうというのに、徒歩の準備しかしておらぬのはなぜか。乗る物がないのか」と問うと、致経「徒歩で参りましても、よもや遅れるなどということはございませぬ。お急ぎくださいませ。」と言うので、僧都「どうも腑に落ちん」と思いながら、松明の火を先導させて、七八丁ばかり行くと、黒装束に弓矢で武装したものが正面から歩いてくる。僧都、これをみて内心恐怖を感じたが、この者たちは致経を見ると、そこに跪いた。「馬を用意しております」と、引き出してくるが、夜の闇で馬の毛並みはわからない。致経のための乗馬用の沓も用意されているので、致経は藁沓の上にそれを履き、馬にまたがった。ヤナグイを背負って馬に乗っている者が二人付き従うので、僧都は頼もしく思いながら、また二町ほど行くと、傍らから先ほどと同じ黒装束に弓矢で武装した者が二人現れた。今度は致経が言葉を発することもないのに、馬に乗って付き従う。僧都「これも致経の郎党だろう。不思議な者たちだ」と思っているうちに、また二町ばかり行くと同じように現れて付き従う。こうしている間、致経は何も言葉を発しない。また付き従う郎党たちは、互いに会話をすることもなく、一町から二町の間行くほどに、二人ずつ付き従ってくるので、鴨川の河原に到着するころには三十人ばかりになった。これを見て僧都は「不思議な者どもだ」と、思うほどに、やがて三井寺に到着した。

頼通の殿に仰せつかったことを済ませて、まだ夜の明けぬ間に帰ることになったが、僧都と致経を取り囲むように郎党たちが護衛をしていくので、僧都はたいそう心強く安心して、鴨川河原まで帰り着いたが、そこまでは郎党たちは散らばることはなかった。都に入った後、致経が何か命令をしたわけではないのに、この郎党たちは往きに現れた場所にくるとまた二人ずつ留まって姿を消していく。そして頼通殿の屋敷まであと一町ばかりなると、はじめに現れた郎党二人だけになった。致経は馬に乗った場所で下馬し、履いていた沓を脱いで殿から出発したときと同じ姿になり、脱いだ物はそのまま放置をすると、その沓を取って馬を引きつつこの二人も姿を消していく。その後はもとの下男だけを従えて、藁沓を履きながら、頼通殿のご門に入っていく。

これを見て僧都、馬も郎党もあらかじめ訓練をして約束をしていたように、現れて消えていくのを不思議に思い「すぐに殿にご報告申し上げよう」と考え、御前に参上すると、頼通の殿はお眠りなさらず帰りを待っておられたので、僧都は一部始終を報告申し上げる。「あのような郎党を従えているのは大した奴ですな」と申し上げると、頼通の殿、これをお聞きになって詳しくご質問なさるかと僧都は予想をしていたが、質問されることもなく、スルーされてしまったので、僧都はあてが外れてそのままになってしまった。

この致経は、平致頼（むねより）という侍の子であった。勇猛なこと世に秀で、とりわけ大矢を射たので、世の人は彼を大矢の左衛門の尉とあだ名したことだと語り伝えられている。

《コメント》

平安末期、平家の勃興期のエピソードです。侍の階級の勃興期であり、その勇猛さと優れた組織性など、貴族社会しか知らなかった旧世代の人々にとっては、新しい不思議な存在として目に映っていたのだ、ということがよくわかる逸話です。

ただ藤原頼通がこのエピソードを聞いても、反応をしなかったということには

興味深いものがあります。これらの事情については、頼通はすでに熟知していた可能性が考えられるのではなかろうかと思われます。

なお、都から三井寺までの経路は、主要な街道の一つであった、鴨川から三条通粟田口を経て山科へ抜け、さらに関山をへて琵琶湖岸にでるコースであったろうと思われます。このコースは、他の話しでも多く登場しています。例えば芥川龍之介の「芋粥」のコースでもあります。

この当時、京の都の範囲は現在の京都市の中心部よりもかなり狭く、東側の賀茂川・鴨川はすでに洛外でした。現在の河原町通りも都の範囲には入っていません。これについては、鴨長明『方丈記』に出てくる有名な五大災厄の記述で、飢饉で亡くなって都の路上に放置された死人の額に、供養のために梵字の「阿」の字を書き、その数を数えるという生々しい描写がありますが、これが参考になります。そのときに区切られた範囲は、北を一条通り、南を九条通り、そして東は京極通り(現在の寺町通りあたり)、西は朱雀通り(現在の千本通り)で囲まれた長方形の区画で、現代の京都の中心部分(河原町通りは含まれない)であり、また当時としては都の範囲を示しているのではないかと考えられます。

新型コロナウイルス禍愚考（その12）

明石　幸次郎

感染拡大で大阪府は4月31日現在で599人の感染者が出て、414人の東京都を上回り「まん延防止等重点措置」が適用される予定となっています。

その拡大の要因は若者の外出増加と3月という年度替りで宴会、会食などの機会が多くなり、感染が増えたことが上げられています。

規制、自粛を緩めたら感染が拡大する、それで又、規制、自粛を厳しく？要請して、感染拡大を防ぐという同じような手法を繰り返しています。

この様に、政府、自治体の対策がどうしても状況追従的であるため、コロナ終息は、ワクチン接種が国民になされ、免疫が出来るまでは、コロナ感染状況下で、どう耐えれるのか。国民の自覚と責任にかかっているような気がします。

さて、コロナ禍の中でも、高齢者は、以前と同じく自由な時間が多くありますが、この時間の使い方が変わってきて、如何に人と関わらず自分でどう楽しめるか、自分との関わり方を意識せざるを得なくなっています。

コロナ禍の前は、大阪では梅田、難波、心斎橋などの間の繁華街は元気で暇のある中高年の男女が、中国、台湾人の観光客と同じように溢れかえっていました。自分達も同じく時々は、OB会や会社の同期会、やれ何とか会という名目で飲み会で集まり、仲間と群れて、その関わりの中で、精神的安定を得るような時間の使い方をしていました。

今は、その様な時間の過ごし方は、感染を避けるために、自粛の空気の中では大っぴらには出来なくなりました。その結果、一人で過ごす時間が多くなっています。

一人の時間が多くなると、一番難儀な自分と関わり、自分はどの様に生まれ、どう生きて来て、これからの残された時間をどう生きて、死ぬのかを考えてしまいます。コロナウイルスが、それを考えさせてくれる時間を与えてくれたのかも知れません。

思うに、いつの時代からか、多くの男は人と生まれたからには、自由で欲望(名誉欲、権力欲、支配欲、色欲、金銭欲)を満たせることが「人生の幸福」に繋がると、想ってきました。その欲望を達せられる近道の手段として、学歴を重視して、世間的評価の高い大学を目指し、時間と金とコネクションを使い、卒業したら職業として官僚、政治家、大企業、又は医者、弁護士、コンサルタントのような専門職に就くことに重きを置いてきました。

勿論、途中で諦めるか、諦めざるを得なかった、私を含む多くの男はそれでも、それなりの欲望を満たして、そこそこ納得をしながら、生きてきました。

コロナ感染禍の中での移動の制限、人との接触を避けた自粛生活では、この様な欲望を満たす幸福だけを望み、それを追い求める人間はそれを手に入れることが出来たとしても、果てしない欲望達成ゲームの虜になってしまい、絶えず「むなしさ」「不安と不安定さ」「満たされなさ」を抱えざるを得なくなる。言わば「死ぬまで欲求不満の状態」におかれてしまうということに気がつき始めた人もいるのではないでしょうか。

仏教においては、人間は果てしないエゴの欲望の循環から抜け出すことでしか、真の幸福は得られないという洞察に立ち、修行や功徳を説き勧めてきました。

又、ナチのユダヤ人迫害にあい、アウシュビッツ収容所での自身の過酷な体験を描いた「夜と霧」の著者である精神科医のフランクルは、誰もが当然のことのように「人生の幸福」を追い求めている、この現代人の生き方は人間の本性に逆らった愚かな生き方でしかないと言っています。

「幸福の追求は、幸福を妨げる」「幸福を意識する事によって、人は幸福になるための理由を見失い、幸福自体が消えていかねばならなくなる」とも言っています。

フランクルは、現代資本主義に生きている我々の、物質的なモノを多く獲得することで、欲望が満たされ、幸福に繋がるような生き方に対するアンチテーゼを

発したものです。

それでは、どうしたら良いのか？　フランクルはこの問いに対して「どうすることも出来ない。ただ自分が幸福になりたいと言うこだわり、エゴを捨てて、なすべきことに取り組むがいい。そうしているうちに然るべき時が来れば、自ずと幸福は手に入るはずである」と言うことが彼の答えであります。

自分だけのエゴを捨て「自分を必要としている誰かがいる。その人の為に出来る事がある。そして、相手もそれを喜んでくれる」といった利他心を持って生きることが結果として、自分の幸福をいつかは見出せると言っています。

昔から老いをよく生きるための不可欠の要素は「諸々の徳を身につけて実践すること」と言われています。これを必要条件とするならば、富や名声などはそれの付け足しに過ぎないのでしょう。欲望、財産のある愚者の老人の苦しみよりも、欠乏に喘ぐ賢者の老人の方が遥かに生きることに耐えるに値するものと言われます。

物質的な欠乏に喘ぐ私も誰かの役に立つ賢者の老人となることを実践して、このコロナ禍の中を耐えて生き抜きたいと思います。

オクラの山たより（５５）

困了生

一

先回、与謝蕪村の一人娘くのについて書きましたが、書きもらしたことがありますので、まず、それに触れておきます。

くのの結婚は一七七六（安永五）年十二月のこと、そして離婚は翌年の五月のことでした。この前後の蕪村と娘くのの状況を見ていきましょう。

前年の十二月に娘を結婚させた蕪村は寂しい気持ちもありましたが、はずむような思いで創作活動をしていった時期でもあります。それはわずか五ヶ月から六ヶ月の間でしたが、束の間の安らぎともいえる期間でした。一七七七（安永六）年二月に春興帳「夜半楽」を刊行しています。この「夜半楽」で蕪村は「春風馬堤曲」十八章、「澱河ノ曲」三章、「老鶯児」一句の三部作を発表しています。この「夜半楽」の冒頭の作品は歌仙（三十六句からなる連句）であり、この時期の蕪村の気分がうかがわれるので少々長くなりますが序詞と最初の三句を紹介します。

祇園会のはやしものは
秋風の音律に協せず
蕉門のさび・しをりは
春興の盛席を避くべし
さればこの日の俳諧は
わかわかしき吾妻の人の
口質（こうしつ）にならはんとして
安永六年丁酉（ひのとのとり）春　初会
歳旦を　したり貌（かお）なる　俳諧師
蕪村
脇は何者　節（せち）の飯俗（はんたい）
月居
第三は　ただうち霞み　うち霞み
月渓

はじめの序詞で「きょうの祇園祭のにぎやかな音曲（おはやし物）は秋風の寂しい響きとは不協和音しか作らず、芭蕉門の『さび・しをり』は我々の春興の華やいだ席に不釣り合いだ」といっており、「されば」と蕪村は言葉をついでいっています。「歳旦の興の祝いの俳諧（連句）は江戸の若わかしい我らが師である宋阿（巴人）の調べに倣おうではないか」と。つまり、今日の宴は江戸にいたころの青春に思いを馳せて賑やかな調べで行こうというのです。

蕪村の発句は年の初めの俳諧を「うまいことしてやったり」と得意顔の自分を鳴り物入りで持ち上げ、江森月居の脇句では「この歳旦の祝いの席の宴に飯袋みたいに食いほうけて脇句を付けたのはいったい誰だ」と発句に調子を合わせて自分のことをとぼけて見せ、こんどは松村月渓が第三句で笛や太鼓のお囃子同然の発句と脇句の賑やかさにびっくりしたように「ああ、私の第三の句はすっかりかすんじゃった、かすんじゃった」と同じ調子で囃し立てています。江戸の芸者や祇園の舞妓を総動員したような賑やかさです。春興に浮かれ立つ夜半亭の楽しい宴の場です。まさに「夜半楽」です。蕪村が重荷を下ろしてホッとした解放感に満ちた気分がうかがわれます。

また、先ほど述べたように「夜半楽」で蕪村は「春風馬堤曲」、「澱河ノ曲」、「老鶯児」の三部作を発表しています。

「春風馬堤曲」が「浪速を出でてより親里までの道行き」を書き、「澱河ノ曲」が成長した伏見の女性の恋人との離別の悲劇を書き、「老鶯児」では「**春もやや あなうぐいすよ　むかし声**」と表現しています。「あなうぐいす」とは「老鶯」のことですが、この三つを並べてみると「春風馬堤曲」以下の「三部作」は女性の一生を描いた物語詩だと見ることができます。母親の五十回忌を直前にあって娘の結婚も終えた時期になぜ「女の一生」をたどる物語を詩で語ることになったのか。それを見ていく上で見落とせない書簡があります。

「夜半楽」の刊行された直後、一七七六（安永五）年二月二十三日付の柳女・賀瑞の母娘宛の書簡で

春風馬堤曲。馬堤は毛馬塘（つつみ）なり。すなはち余が故園なり。

と自分の故郷について驚くほど率直に書いています。蕪村が自分の出自について自ら語った唯一の記述です。一家離散の

憂き目にあった自分の家族、故郷の人々への罪の意識にさいなまれて故郷に強くひかれつつもついに故郷を忌避し続けた蕪村が、ここでやっとその呪縛から解放された様子がよく分かります。

先ほど述べた「夜半楽」の冒頭の言葉および最初の三句にも蕪村の解放感は大きさがみてとれます。この解放感によって精神の思わぬ伸張を得たためか、この時期の蕪村は生涯の「絶頂期」つまり蕪村の文学的感興の最も昂揚した時期であり、蕪村の創造性が最も開花した時期であると子規門の俳人河東碧梧桐は評しています。

二

こうした精神高揚期にあった蕪村は母親の五十回忌に向けて「新花摘」に収められた句作りに四月八日から取りかかります。しかし四月二十四日の条に

この日より所労のために、よろづ怠りがちなり。発句など案じ得べうもあらねば、いく日もいたづらに過ごしはべる。

とあって、百三十六句目でいったんは中断されます。今に残る「新花摘」の構成は句が中断した後、翌日から六月十六日の日付までの文章編との合作となっています。いうまでもなく「所労」、つまり、蕪村を苦しめた心痛の原因は娘くのの離婚問題でした。

娘の結婚がもたらしたわずか四ヶ月ほどの精神の高揚、そして、その離婚による落胆。蕪村の精神の同様はかなりのものであったのでしょう。前回、紹介した安永六年五月二十三日付の正名・春作宛の書簡でくのの離婚を伝えた末尾で

さみだれや　大河を前に　家二軒

を「追て書き」しています。この句は五月十日に開かれた夜半亭月並句会で詠まれたものですが、ギリギリのところで何とか頑張っている二軒の家の健気さと憐れさを詠んだ句ですが、蕪村の心の不安が表現されているようです。蕪村の心の表白ということになれば次の句も見逃せません。いずれも「新花摘」にある四月十九日の句です。

① 若竹や　是非もなげなる　芦の中

② さみだれや田ごとの闇となりにけり

①は「威勢のよい若竹も水辺に繁茂する芦の間でたった二、三本ではどうしようもない」という句意。愛娘くのの絶望的な離縁問題を暗示する句と思われ、擬人法を用いた「是非もなげなる」は経済的なことしか関心のない俗人たちの中に孤立無援の状態となった娘（「若竹」）の憐れな風情の比喩であると考えられます。②は「五月雨が降り続いて田毎に水は満ちたが、月は暑い雨雲に閉ざされ、どの田も闇夜のように暗くなってしまった」という句意で作者蕪村の暗澹たる心境を言い表しています。

三

さて、ここまで娘くのの結婚と離縁に伴う蕪村の心の動きを追ってきたのは実は次の句をこの時期の蕪村の状況から検討してみたかったからです。蕪村には珍しく口語調で細やかな情念のこもった句です。

雪の暮　鳴はもどって　居るやうな

この句は几董が編んだ「蕪村句集」に見られるだけで他にはまったく見当たりません。それだけにいろんな解釈が可能な句で、空想も含めて多様な解釈が可能です。一般的な解釈は先ほどの河東碧梧桐によるものでしょう。

水郷に住む閑寂な一心境……秋には立つ鳴（しぎ）であるから、今は戻ってゐるといふのではない。鳴のやうな水辺の鳥とともに棲み、共に今日を楽しんでゐる感慨

碧梧桐の解釈のポイントは水郷に隠棲した鳴とよく似た鳴き声を出す鳥たちとの暮しを作者が楽しんでいる、ということでしょうか。人間探求派の中村草田男もどうやら同じ意見で次のようにいっています。

水郷に住みなれたので、今ではさまざまの水禽の鳴く音も羽音もいちいちそれと分かる。雪降るままに暮れていく今宵、ふと耳にした気配によれば、しばらく音沙汰のなかった鳴たちが、また元の水辺に戻ってきてゐるやうだ。

中村草田男はさらに松尾芭蕉から「細みあり」と賞された路通の句、「鳥どもも寝入って居るか余呉の海」を挙げて、蕪村はこの句を念頭に置いて作られたものであろうとしています。その通りかもしれませんが、安東次男氏はこの解釈は間違いであり、その誤りの発端は、句中の「鳴」を浜辺の「鳴」と思い込んだところにあるとされています。私も同感ですが、このことについてもう少し検討してみます。

「鳴」をとりあげた歌で有名なのは西行法師の

心なき　身にもあはれは　知られけり
鳴立つ沢の　秋の夕暮れ

ですが、この歌にある「鳴」は歌中にもあるように沢辺の「鳴」です。河口や沢辺に棲む「鳴」は秋の間は芦の生えたところに住みついているのですが、冬になると南方へと渡っていってしまう渡り鳥なのです。では冬になっても日本から離れずにいる「鳴」は何なのか。それは「田鳴」「山鳴」という種類です。なかでも「田鳴」は「鳴の看経（かんきん）」といわれるように枯れ草や稲を刈った後の田にこもってひっそりと厳しい冬の時季を過ごす鳥なのです。

この「田鳴」はよく和歌に詠まれ、たとえば殷富門院大輔（いんぶもんいんのたゆう）には「新古今和歌集」六〇六番につぎのような作品があります。

我が門の　刈田の面に　臥す鳴の
床あらはなる　冬の夜の月
（私の家の門近くの刈田を寝所として臥している鳴の寝床もあらわに照らし出している冬の月よ）

しんと静かな冬の月に照らされた刈田。冷たい明るさにすべての物音が吸い込まれていったといった情景で、冬の田鳴の様子をよく表現した歌です。

この歌は「新古今和歌集」によく見られる本歌取りで「後拾遺和歌集」にある藤原顕季（ふじわらのあきすえ）の次の歌が本歌とされています。

鳴の臥す　刈田に立てる　稲茎の
否とは人の　いはずもあらなん
（鳴が臥している刈田で立ち残っている稲茎の中に籠っているようなあなたですが、私のことをイヤとは言わないこともきっとあるのでしょうね。）

これは田鳴に寄せた恋の歌ですが、鳴の看経のさまをよく描いています。想いをよせる人はひたすら看経に籠っている女性でしょう。霜降る夜の屋外で邸宅の内をうかがいながらウロウロしている男の慕情がよく現れています。

古来、鳴の歌には二つの流れがあり、一つは先ほどの西行の歌にあるような「しぎ立つ沢」「しぎ立つ暮れ」「しぎ立つ野辺」など去りゆく秋の憐れを詠んだものです。いま一つは先ほどの顕季の歌のように「恋歌」と分類されるものです。「恋歌」とされる歌を一つ。「詠み人知らず」とされる「古今和歌集」にある歌です。

暁の　鳴の羽根掻（はねがき）　百羽掻
君が来ぬ夜は　我ぞ数掻く

「羽根掻き」は鳥がくちばしでその羽をしごくこと、「百羽掻（ももはがき）」は何度も「羽根掻き」をすることです。「数ぞ掻く」はよく分からないのですが「イライラして何度も同じ動作をする」ということでしょうか。明け方まで待っても恋人がなかなかやってこない不安な気持ちが表れています。

さて、そうなると蕪村は沢辺の鳴、刈田のこもって看経をする鳴、どちらをイメージして「冬の暮」の句を作ったのでしょうか。冬の暮れに戻ってくる鳴とあるので、沢辺の鳴というわけには行きません。ここは安東次男氏の意見の通り田鳴のイメージでしょう。冬の月に照らされた刈田でひたすら声も立てずにいる鳴の姿を婚家でひたすら耐えている娘のそれに重ねたものとみるべきであり、そして、そうした娘へのあふれるばかりの愛情がつまった句、そしてそれを直接言っていけない父親の思いのこもった句だというべきです。

四

父親であれば誰もが一度は経験する娘とのいさかい事。人一倍子煩悩であった蕪村にもそれはありました。宛先は不明なのですが、安永五年頃の書簡が残されています。

御使い殊の外、待たせ申し候。その故は娘それがしに向かひ過言いたし、さてさて憎き者と存じ候へども、骨肉の愛情ゆゑ、異見真最中、（お使いの人を待たせたのは）この訳に候。

娘の何ということのない一言に腹を立ててつい口争いとなったものの、後からしまった言い過ぎたと後悔した記憶は父親であれば胸に覚えのあること。しかも、いさかいのあと娘がどこかへプイと出かけてしまったとあれば子煩悩の父親としては心配で仕方なくなる。しばらくして娘は帰ってきたらしくヒソヒソと母親と話しているらしいが、こちらから声もかけづらい。何となく落ち着かなくて部屋の中をウロウロと歩き回っている父親蕪村の姿が見えるようです。別の部屋でひっそりと話し合う母と娘。二人から「仕方のないお父さんね」と言われているのかと気にかかるが直接に聞くわけにもいかず自分の部屋で悶々とする父親。この家庭的な喜劇を押し包む京の雪の暮れ。蕪村絵画の傑作「夜色楼台図」に描かれた世界のもとでのヒューマンコメディーを見るようです。

しかし、一人娘のくのを溺愛した蕪村が「鳴はもどって居るやうな」と語った胸の内を想像するに次のように考えるのも可能です。

先回、述べたように娘を婚家から取り戻した理由は娘の嫁ぎ先があまりに金銭万能主義にあるとしていますが、それだけではなかったでしょう。「雪の暮れ……」の句が家庭状況の心象風景と考えるならば、嫁ぎ先での生活の苦しさ、それも父親には話しにくい悩みを持って、ひそかに勝手口から我が家にやって来た娘くのの姿が浮かんできます。

蕪村の家は四条烏丸のあたりで、嫁ぎ先の柿屋伝兵衛の家は西洞院椹木町下る。その間の距離は三キロたらずです。安永五年の暮れから安永六年の春にかけて、里帰り等でくのが実家に戻ったことは何度もあったのではないか。そして、それは家の中に明るい笑い声をもたらす訪問ではなかったはずです。父親の作業部屋には入らず、台所で涙ながらに嫁の辛さを母親に訴えたこともあったことでしょう。それはヒソヒソと声を低めて語られる内容であったはずです。いつのまにか娘は実家に戻ってきたらしく、母親に何かを訴えようとしている。蕪村は全身を耳にしてそれを聞き取ろうとし、心は敏

感にその気配をかんじとっていたにちがいありません。絵筆をおいて娘の話を聞いた方がいいか、いや、これは女同士で語り合った方がいいのではないか、と迷い落ち着かない気持ちでいる父親の蕪村。こういった想像もできるのではないでしょうか。

気候変動による温暖化で「雪の暮れ」に部屋でたたずみボンヤリと考える機会も減りましたが、この句についての想像は次から次へと広がっていくばかりです。「たとえば」の話ですが、私自身に世慣れぬために辛い毎日の婚家から抜け出してきた娘がいたとしたら、出口のない想像の世界に踏み迷うことなく、この句を作った蕪村の真意にもっと迫れるかもしれません。幸いにも私にはそんな経験がないためそんな想像は途中で立ち消えるわけですが、やはり心のどこかでひっかかりを感ずるのか忘れがたい一句です。

ある文芸批評家によれば「詩を読むということは、孤独ゆえに同行者を求める心であり、想像の止まったところに既に詩はない」とか。いったんは忘れたとしても、また他日まったく別の見方でこの句をながめる日がないとも限りません。その楽しみを我々に残していくのが詩歌というものなのでしょう。そういえば蕪村に「今日は今日の俳諧にして、翌（あくる）はまた明日の俳諧」という言葉があります。名歌・名句を何度も心の中で繰り返し味わっていく。それこそが老後の楽しみとなりうるのでしょうか。とはいえ、そうした境地になるには古稀にまだ少し間のある私にはいくぶん早すぎるようです。

隠された歴史（３０）

満田　正賢

前回から山崎仁礼男氏の「蘇我王国論」を批判的にご紹介しています。今回は「蘇我王国論」総論批判の続きから始めます。山崎氏は前編の各論の中で、用明紀は造作であり、用明は天皇になっておらず、実際には敏達崩御のあと、崇峻が即位したのではないかと考察しています。又押坂彦人大兄皇子は皇太子ではなく、舒明・皇極も架空の天皇であるという考察をしています。そして、『書紀』編者が聖徳太子と天智・天武王系の美化のためにその編集の途中で造作したと考えます。山崎氏は、欽明の系図については考察の対象外としていますが、山崎氏が仮に欽明紀に焦点をあてていれば、記紀が隠した真実の全体像に近づいていたのかも知れません。山崎氏が欽明紀を考察の対象から外した理由は「継体の乱で磐井が殺されたことに怒った九州王朝が継体王国を滅ぼし、監視役として蘇我氏を近畿に送り込んだ」という思い込みが各論の考察前にすでに出来上がっていた為だと思います。そこに山崎氏が真実に近づきながらたどり着けなかった、ブレークスルー出来なかった原因があったと思います。それではここから「蘇我王国論」の各論批判に進みます。最初に、第三章「用明天皇架空論」と第四章『古事記』は何故推古記で終わるか」を取り上げます。著者の山崎仁礼男氏は、この二つの章を蘇我王国実在の証明に関する考察をまとめた前編の中に入れていますが、この二つの章は表題を見ても分るように、蘇我王国の実在証明を論じているのではなく、いわゆる「記紀成立論」です。そして「記紀成立論」として見ると、非常に斬新で重要な考察をしています。

山崎氏は、第三章、第四章で次のように論じています。

①九州王朝の支配下ではあるが、欽明王家の王位の継承や相続については王朝に準じた王位継承が求められていた。

②近畿天皇家万世一系の歴史を綴った『書紀』の編纂過程で書き換えがあり、用明紀は後から追記・造作された。用明紀を造作したのは、聖徳太子の造作の伏線である。池辺の皇子と厩戸皇子は実在したが、用明天皇と聖徳太子は造作された架空の人物である。

③推古は後妻の皇后ではなく初めから敏達の正妃である。広姫は敏達の皇后ではない。

④日本書紀は推古で途絶えた欽明王家主流の歴史を綴った『書紀』と、舒明以降の傍系の『書紀』に分かれる。

⑤敏達と広姫の間に生まれた押坂彦人大兄皇子は皇太子ではなく、その子である舒明もその妃の皇極も天皇ではない。すべて天智・天武王系の美化の為に創作されたものである。

⑥推古紀までの『書紀』は天武天皇によって一旦まとめられた。それを残しているのが『古事記』である。そして、舎人皇子の時代に傍系の舒明紀以降が作られ、広姫を敏達の皇后とすることによって両者がドッキングされ、さらに用明紀が追記・造作された。

山崎氏は、日本書紀の造作を、実在した人物の地位（立場）の造作という観点で捉えています。具体的には、用明天皇、聖徳太子、広姫皇后（敏達妃）、押坂彦人大兄皇太子、舒明天皇、皇極天皇の地位（立場）を造作と見做しています。山崎氏の主要な論証は以下の通りです。

①推古紀と敏達紀の矛盾。推古即位前紀に記された推古天皇の略歴「一八歳にして、渟名倉太珠敷天皇の皇后と為る。三四歳にして渟名倉太珠敷天皇崩りましぬ。」の年齢と推古紀三六年の「天皇崩りましぬ。時に年七五」で計算すると、敏達天皇の没年が敏達紀の記すそれと二年違い、推古立后の年は敏達紀と五年違う。即ち、用明在位二年と敏達皇后広姫の死去（敏達五年）を省けば整合がとれる。

②推古の即位時期については、推古即位前紀の推古立后＝敏達即位とすれば丁度成立する。さらに『古事記』では推古が后妃の筆頭者であり広姫は三番目に書かれている。『古事記』においては敏達の正妃は推古である。

③敏達の葬儀の異常な遅れ。書紀は敏達の葬儀を崇峻紀四年に記しているが敏達の死は敏達紀一四年（五八五）なので、崇峻紀四年（五九一）では六年後の葬儀となる。しかも母の石姫の墓に合葬である。一方、用明天皇は用明紀二年（五八七）に亡くなり、死の三ヶ月後に葬儀が行われている。その時点で敏達の葬儀はまだ済んでいない。用明の葬儀を実際には敏達の葬儀であったと考えるとつじつまが合う。

④敏達紀七年三月記事「菟道皇女を以て伊勢の祠に侍らしむ。即ち池辺皇子に姦されぬ」の池辺皇子とは欽明か敏達の皇子であり、池辺双槻宮にいた用明以外に該当者はいない。後に天皇になる用明が天皇制の神聖なる伊勢斎王を犯した人物として描かれているのは、用明が天皇ではなかった証拠である。

山崎氏は上記に紹介した疑問点以外にも多くの疑問点の抽出をおこなっていますが、本論では省略します。用明紀が造作されたものであるという仮説に関する山崎氏の論証は見事な論証であり、この仮説は正しいと考えます。また、息長氏出身の広姫を敏達の最初の皇后に造作することによって、押坂彦人大兄の「皇太子の造作」、そしてその子である舒明とその妃の皇極の「天皇の造作」をセットで造作したという仮説も正しいと考えます。広姫皇后、押坂彦人大兄皇太子、舒明天皇、皇極天皇は、日本書紀が天智・天武王系の美化の為に造作したものであるという山崎氏の考察には全面的に賛同したいと思います。この考察は「日本書紀は何のために作られたか」という問いかけにダイレクトに答えられるものとなっているからです。そして、用明天皇の造作は天智・天武王系の美化とは別の動機を持ち、聖徳太子の造作とセットになっているという見方にも賛同したいと思います。

一方で、山崎氏の論証を記紀成立論の側面で捉えると、多くの問題点があります。山崎氏は、「天武天皇が推古紀までの日本書紀を作った。天武天皇は『欽明王家の推古時点の一時的滅亡と天智による復活』という歴史の基本を書き換えようとは思わなかった」そして古事記は「天武天皇が作った推古紀までの日本書紀そのもの」と見做しています。しかしこの考察は明らかに誤りです。古事記には「用明記」があり、その子「上宮の厩戸豐聰耳命」が記されています。（＊なお、推古記には聖徳太子が摂政となったという記事はありません。）また敏達記には「息長真手王の女、比呂比売命を娶して、生ませる御子、忍坂の日子人の太子、亦の名は麻呂古王（中略）日子人太子、庶妹田村王、亦の名は糠代比売命を娶して、生ませる御子、岡本宮に坐しまして、天の下治らしめしし天皇。」と記されています。すなわち用明天皇・「上宮の厩戸豐聰耳命」も押坂彦人大兄皇太子、舒明天皇も、日本書紀と古事記に共通した記述であり、従って「天武天皇が作った推古紀までの日本書紀」という仮説に導く根拠が存在しないからです。おそらく山崎氏は日本書紀の成立に注目するあまり古事記の内容確認を怠っていたのではないでしょうか。

山崎氏は、推古紀までの『書紀』が天武期に成立していて、後に舒明紀以降の『書紀』が造作されて推古紀までの『書紀』と合体されたと考えています。しかし私は、天武時代の『書紀』原稿があって、それを舎人親王の時代に書き換えたという仮説には賛同しません。なぜなら、「隠された歴史(２５)で触れましたが、推古紀・舒明紀とも共通して森博達氏の分類したβ群（倭習（和臭）と呼ばれる日本固有の仮名遣い、本居宣長が言うところの「上代特殊仮名遣」で表記された歌謡が含まれているグループ）に属しており、小島憲之氏も「上代日本文学と中国文学」において両者が漢文的潤色（引用）の少ない条として考察している、すなわち推古紀・舒明紀に共通性を見いだしているからです。古事記と日本書紀には推古期までが記された共通の元史料があって、日本書紀はその元史料に海外史書、九州王朝に残されていた史書などその他の史料を加えて、すべて新たに作成されたという見方が正しいと考えます。私は隠された歴史（２３）で、「欽明天皇は実際には蘇我氏の娘と婚姻した安閑天皇の子であり、蘇我馬子によって造作された架空の天皇である」と論じました。そして、「蘇我馬子は自らが作成した『天皇記』『国記』によって架空の『近畿天皇家』を造作した」と論じました。さらに「古事記は『天皇記』『国記』をリメイクしたものであり、そこには同時代に存在した後期九州王朝が隠されている」と論じました。しかし、古事記には「天皇記」「国記」が完成した推古二八年(六二〇)時点では発生していない記事が記されています。一つは推古記に記された推古の崩御記事であり、もう一つは敏達記に記された、舒明天皇に関連する記事です。この二つの記事は古事記が「天皇記」「国記」をリメイクした際に天武天皇によって追加されたと推測します。

従って、「用明天皇」と「上宮の厩戸豐聰耳命」の造作には二つの可能性が生じます。第一は「用明天皇」と「上宮の厩戸豐聰耳命」は蘇我馬子が作った偽りの史書「天皇記」「国記」に記されていたものという可能性です。蘇我馬子は偽りの近畿天皇家の実際の家長相続の系譜「欽明（安閑の子）→敏達→崇峻→推古」という系譜の中に「用明」を挿入して「上

宮の厩戸豐聰耳命」の権威を高めたということになります。第二は天武天皇が「天皇記」「国記」をリメイクして古事記を作成するよう指示した際に、押坂彦人大兄皇太子、舒明天皇の造作と共に「用明天皇」と「上宮の厩戸豐聰耳命」の造作もあわせて計ったという可能性です。私は、蘇我氏の血が濃い「用明天皇」と「上宮の厩戸豐聰耳命」を天武天皇が造作する可能性は低いと考えます。「用明天皇」と「上宮の厩戸豐聰耳命」は蘇我馬子の造作と考えて良いのではないでしょうか。池辺皇子が実際には天皇ではなく伊勢斎王を犯したという評判だけが残る劣悪な人間であったとすれば、その子の厩戸皇子に血筋としての権威があったとは思われません。蘇我馬子が「用明天皇」と「上宮の厩戸豐聰耳命」を造作した理由は、蘇我馬子が実際に蘇我氏の血が濃く有能な厩戸皇子を重用していた為ではないでしょうか。

欽明期から推古期までの山崎氏の考察に対応する私の仮説をご紹介します。

①欽明紀には近畿の姿がほとんど記されていません。近畿は倭国（後期九州王朝）の強力な支配下にあり、蘇我氏・物部氏など有力豪族がひしめきあう状態にあったと考えます。山崎氏は、欽明王家は滅ぼされた継体王家を継ぐものであり、蘇我氏は九州王朝から近畿に派遣されたと考えていますので、出発点が異なります。

②敏達期（記紀上は用明期が含まれる）には、日羅記事に見えるように近畿勢力が九州王朝と一定の距離を持ち始めたと思われます。山崎氏は日羅記事を九州王朝の記事と見做していますが、日羅記事の舞台は近畿であり、筑紫は百済が密かに侵略しようとしている地域として描かれています。又、近畿の中では「欽明王家」の敏達を間にして物部守屋と蘇我馬子が覇を競う状況が生じていたのではないでしょうか。

③崇峻期には、蘇我物部戦争によって蘇我馬子が近畿の覇者となり、「欽明王家」の後継者たる崇峻も殺害したということが考えられます。なお、崇峻は古事記によれば堅塩媛の姨（蘇我稲目の義妹？）にあたる小姉君と敏達の間の子であり、蘇我馬子に反発していたと考えられます。

④推古期には蘇我馬子が倭国王（後期九州王朝）に対して近畿の独立性を高め、「欽明王家」を継いだ推古を傀儡として尊重しつつ実際には自らが厩戸皇子を重用しながら倭国内での実力を強めていったということが推測出来ます。推古三二年（六二四）の推古天皇の「朕は蘇我の出であるが・・・」という言葉が蘇我氏と「欽明王家」の関係を裏付けていると考えます。

⑤山崎氏の考察によれば、舒明・皇極天皇は造作です。それではその間の近畿はいったいどうなっていたのでしょうか。おそらくすでに蘇我氏は「欽明王家」を傀儡とすることはせず、蘇我蝦夷、蘇我入鹿が直接「近畿天皇」という立場で振る舞っていたのではないでしょうか

蘇我入鹿は「上宮家」という称号を与えられていた山背大兄を殺害し独裁体制を強めました。乙巳の変に到る日本書紀の記述は、それを匂わせるものであると推測出来ます。

【　続く　】

「道をゆく」（２４）

成瀬　和之

「熊野街道」（一一）

大阪の熊野街道までは、全コースを見てきましたが、和歌山県に入ってからの紀伊路は、見どころの多いコースを選んで、書いていくことにします。

①海南から藤白峠を登る

紀伊路の道歩きは、熊野の入り口とされた海南の藤白坂から始めるのがお薦めです。

ＪＲ海南駅を出たら前の広い道を左へ行き、古い町並みをぬけ、ＪＲ紀勢本線の高架を潜れば和歌山市から続く熊野古道に合流することができます。その交差点に「熊野一の鳥居」があります。広い意味で熊野の聖域の入り口とされ、参詣者は近くの祓戸（はらえど）王子で心身を清める垢離をとり聖域に入りました。寄り道して交差点のさきの角を左へ曲がると祓戸王子の説明板があり、さらに山道の石仏を見ながら三分ほど歩くと、小高いところに王子跡碑が立っています。「一の鳥居」跡に戻り、そこを左折し、西へ進めば、藤代王子（藤白神社）に至ります。藤白神社の敷地内手前に鈴木姓の発祥の地とされる鈴木屋敷があります。熊野信仰を広めた旧社家・鈴木氏の旧邸です。

藤代王子は九十九王子の中でも格式の高い五躰（ごたい）王子の一つです。時代とともに失われた王子が多い中で、藤白神社として現存し、往時の面影をよく残しています。藤白王子権現本堂には平安末期作の熊野三所権現の本地仏（阿弥陀如来、薬師如来、千手観音座像）、藤白若一（にゃくいち）王子権現の本地仏である十一面観音立像などを安置しています。神社の中に仏像が祀られているのです。つまり「神仏習合」を示しています。

藤白神社から約三分、藤白坂の入口に有間皇子の墓碑が立っています。六五八年有間皇子は謀反の疑いで捕えられ紀温湯（きのゆ　白浜温泉のこと）に行幸中の斉明天皇のもとへ護送されました。その帰路、藤白坂で絞首刑にされたといいます。墓碑の隣には、皇子が護送中に詠

んだ「家にあれば　笥（け）に盛る飯（いい）を草枕　旅にしあれば　椎（しい）の葉に盛る」の万葉歌碑も立ち、悲しみを誘います。

また、この場所の傍らには丁石（ちょうせき）地蔵の一丁地蔵が祀られています。江戸中期、海南の高僧・全長上人が藤白坂の一丁ごとに安置した一七体の地蔵の一つです。当初のものは一丁地蔵を含め四体しか残っていませんが、一三体が復元され、道案内役として参詣者を和ませています。

四丁地蔵の所から左の山道へ入ります。ここが藤白坂の登り口に当たります。古道感漂う林の中の道を登ると「筆捨松（ふですてまつ）」の旧跡に至ります。平安前期の絵師・巨勢金岡（こせのかなおか）が熊野詣の途次、熊野権現の化身の童子と絵の描き比べをして負け、松の根元に絵筆を捨てた場所と伝えられています。

急坂を上り詰めると、塔下（とうげ）王子（地蔵峰寺（じぞうぶじ））のある峠に着きます。地蔵峰寺の本尊は、石造りの三メートルを超える高さの地蔵像です。禅宗様式の本堂とともに国の重要文化財に指定されています。本堂の右手に入ると、白河上皇の行在所跡という「御所の芝」とよばれる広場があります。ここからの眺めは「紀伊国名所図会」に「熊野第一の美景」と記され、和歌浦や紀伊水道を眼下に、遠く四国まで見渡せます。

ここから拝（はい）の峠を越えて有田まで熊野古道は続きますが、一四・四キロメートルあります。初心者や私のような高齢者は、ここまで登って引き返すだけでも充分楽しめます。海南駅から塔下王子の往復で約八キロメートルの行程です。

②徳生寺から糸我峠を越えて湯浅へ

ＪＲ紀伊宮原駅を降りて、駅前の道を左に進みます。突き当りを右折すると有田川に架かる宮前橋です。橋の手前に天神社があります。その辺りの川原は宮原の渡し場跡です。往時の旅人は、ここから舟で川を渡りました。宮前橋を渡ってすぐ左折し、堤防の上の道を行きます。道標に従って堤防から下り国道四二号線に出ると「中将姫寺（ちゅうじょうひめでら）」の大看板、その足元にも「右熊野参詣道」の道標があります。すぐに中将姫ゆかりの徳生寺（とくしょうじ）に着きます。中将姫に仕えた伊藤春時が姫のために建てた雲雀山の草庵が寺の始まりとされ、その僧名から雲雀山徳生寺と称するに至ったと言います。

天平の昔、藤原豊成の娘・中将姫は、後妻の継母いじめで殺されそうになるが、危うく難を逃れ、有田郡のひばり山へ逃げる。その後、大和の當麻寺に入り、阿弥陀仏の浄土の世界を祈念して浄土曼荼羅を一夜で織り上げる。そして、その功徳で極楽往生を遂げた。

以上が中将姫伝説の骨子です。継子いじめの話は中世以降に付け加えられ、その起源は當麻曼荼羅縁起絵巻に由来すると考えられます。以後、中将姫伝説を題材にした御伽草子や能楽、浄瑠璃、歌舞伎などの種々の名作が生み出されていきました。徳生寺の境内の開山堂に中将姫像が安置されています。また、境内には有田の古名「足代（あて）」を読みこんだ万葉歌碑も立っています。なお、ひばり山伝説は奈良県宇陀市宇賀志青蓮寺にもあります。

徳生寺から南下すると、日本最古の稲荷社とも言われ糸我王子が合祀されている糸我稲荷神社があります。その前には白河法皇御車寄せ旧跡の碑が立っています。

徳本上人名号碑を納めた祠を過ぎてすぐ左側の小さな広場に糸我王子があります。一三世紀初め、藤原定家が参詣日記に「いとカ王子」と記載した王子社で、一九九五年に再建されました。

糸我の道標を過ぎるとミカン畑の間を上がっていく道になります。登り切れば糸我峠です。万葉の歌枕に「絲鹿の峠」として出てきます。

江戸時代、ここには二軒の茶店がありました。名産のミカンを夏まで貯え旅人に出したのが評判だったと伝えられています。また、この峠からは「万葉の熊野古道」と名付けられた栖原（すはら）海岸へのルートが分岐しています。

夜泣松跡や北谷池横を過ぎると、吉川の集落です。ここに逆川（さかがわ）王子があります。逆川王子の名は、近くを流れる逆川に由来し、藤原定家の記録には「サカサマ王子」と書かれています。近辺の他の川が海に向かって西流しているのに、地形の関係で東にながれているので、この名になりました。昔は地区名も逆川でしたが、名を忌んで「吉川」と改められたと言います。

弘法井戸などの伝説の名所の前を通り、方津戸（ほうづと）峠に至ります。高くはない峠ですが、江戸期の醤油業が盛んだった頃には湯浅の玄関口となり、藩役人の付き添う大阪方面からの醤油売上金移送を正装で出迎えた峠だったそうです。

峠から下って、湯浅の道町（どうまち）通りを通ります。江戸期の面影をとどめる醤油発祥の地です。立石の道標を見て湯浅駅に至ります。

マルクスから学ぶ（3）

成瀬和之

前回の最後の方で「100 分で名著　資本論」（ＮＨＫテキスト）を買いましょう。そして、斎藤幸平さんの『人新世の「資本論」』（集英社新書）は必読です、と書きました。

斎藤幸平さんのその他の著書に「資本

主義の終わりか、人間の終焉か？未来への大分岐」（集英社新書、2019年）という対談本もあります。

その本の中で、カール・マルクスならぬ、マルクス・ガブリエルとの対談が出てきます。マルクス・ガブリエル（以下MGと略します）は、史上最年少で、権威あるドイツのボン大学哲学正教授に抜擢されて注目を浴び、NHK「欲望の資本主義」シリーズなどでメディアの寵児となった人です。今回はその「もう一人のマルクス」から学ぶことにしましょう。

「マルクス」と斎藤さんとの対談の一部を、要約して紹介します。

斎藤：「ポスト真実」と呼ばれる社会状況が、今、哲学に大きな挑戦状を突きつけているのではないかと感じています。誤った事実があふれるなか、人々はそれぞれの立場での個人的な思い込みに固執するようになっています。極端な例をあげれば、日本では従軍慰安婦の存在を否定する人がいましし、ドイツにもホロコーストの存在を否定する歴史修正主義者がいます。

MG：しかし注意してほしいのは、それぞれ異なる、いくつもの「真実」があるわけではない、という点です。ホロコーストと従軍慰安婦は「自明の事実」です。「自明の事実」を否定する人たちとの対話は非生産的ですよね。「ホロコーストはあったんですか」と聞かれたら、「もちろん」と答えるしかないでしょう。「なぜそう言えるのですか」とただされれば、「歴史の本と生き残った犠牲者たちの証言から」と答えるしかない。果ては、歴史修正主義者はこう聞いてきます。「なぜ、犠牲者と名乗る人たちの声を信用するのですか」と。でも、なぜ、犠牲者たちを信用せずに、歴史修正主義者を信用しなくてはならないのでしょう？　ホロコーストを疑う理由があるかって？　そんなものはないですよ。ホロコーストは、太陽系の惑星の数と同じくらい客観的な事実です。

斎藤：「自明の事実」を自明ではないかのように見せる、際限のない問に目を奪われて、私たちは「自明の事実」に向き合うことができなくなっています。他方で、フェイクを論駁することにも疲弊しつつあります。ツイッターなどで、事実を事実と認められない人々と話し合うと、相手がまったく異なる世界に住んでいるように感じられ、対話はほとんど不可能に思えるからです。けれども、そうした議論をやめてしまえば、民主主義は弱体化してしまうというジレンマがある。この状況で開き直るのが、「相対主義」です。つまり、正義、平等、自由というような、世界のどこにも通用する、普遍的な意義のある概念なんてものは存在しない、存在するのは、土地ごと、文化ごとのローカルな決定だけなのだという考えです。

MG：ええ、事実があるところで事実を見ないという結果をもたらす相対主義は、間違っているというだけでなく、民主主義にとって非常に危険な考え方です。フェイスブックやツイッターなどのSNSは情報の喫煙とも言えるもので、多くの害、知的な害をもたらしています。ウィキペディアも喫煙に似ています。「ウィキペディアにはあらゆる情報があって、素晴らしいじゃないか」と思うかもしれませんが、本当の情報は得られません。生煮えの情報しか得られないのです。これまでにタバコや有鉛ガソリンを民主主義的な方法で規制してきたように、次はソーシャルメディアを規制する番です。情報共有と対話のためのプラットフォームとしてSNSは重要ですが、現状のインターネット空間は、目指すべき形からかけ離れているので、根本的な規制が必要です。たとえば道路交通に、現在は徹底したルールが敷かれていますが、ルールが導入される前の時代には、人々は車を好き勝手に運転していました。ところが車が増えて交通事故が多発したために、「交通ルールが必要だ」という声があがったのです。一方、インターネットは危険な情報の高速道路のようなもので、しかも非デジタルな現実と複雑に重なり合っています。道路に交通規制があるように、当然、インターネットにも規制が必要なんです。

斎藤：罰則をもつような法的規制があってこそ、言論の自由が成り立つというわけですね。

みなさん、どう思われますか？　現代社会は「自明の事実」も「ポスト真実」によってひっくり返されてしまう「逆立ち思想」がはびこる時代なのです。アジア・太平洋戦争に敗北した後、戦後の民主教育運動の中で「だまされない力」や「手をつなぐ力」が強調されたことがあります。今再び、私たちのメディア・リテラシーが求められる時代だと言えるでしょう。さらに詳しく知りたい人は「資本主義の終わりか、人間の終焉か？未来への大分岐」（集英社新書、2019年）を読みましょう。

カール・マルクスの「資本論」は「逆立ち経済」を読み解く書物です。「経済の逆立ち」を考える前に、今日は「思想の逆立ち」について考えてみました。

編集後記

SK生

最近、共感を覚えた一句。「散るころに咲く桜あり。僕みたい」　作者は静岡在住で54歳の高校教員、静誠司さん。「僕みたい」がとてもいい。作者の静さんはともかく筆者が遅咲きの桜となるかどうかは甚だ心もとない。心がけるべきはまず健康、そして日々の精進だろうが、コロナ第4波と聞いてはつい心がなえる。静さんの句を読み破顔一笑、元気注入と行きたい。

連載 ふみの道草（３４）　山椒魚

教室はまちがうところだ

教師という器に張った水を、こんな風にかき混ぜ揺することができる教師もいたことを知った絵本である（蒔田晋治・作、長谷川知子・絵：子どもの未来社、二〇〇八年、第十三刷）。作者は一九二五年生まれ。師範学校を出て公立の小・中学校に勤務し、主として版画教育・作文教育・卓球指導などに携わったという。絵本であるが文章だけを拾っても楽しくなってくる。

教室はまちがうところだ
みんなどしどし手をあげて
まちがった意見を言おうじゃないか
まちがった答えを言おうじゃないか

まちがうことをおそれちゃいけない
まちがったものをわらっちゃいけない
まちがった意見をまちがった答えを
ああじゃないかこうじゃないかと
みんなで出しあい言いあうなかでだ
ほんとのものを見つけていくのだ
そうしてみんなで伸びていくのだ

いつも正しくまちがいのない
答えをしなくちゃならんと思って
そういうとこだと思っているから
まちがうことがこわくて
手もあげないで小さくなって
だまりこくって時間がすぎる

しかたがないから先生だけが
勝手にしゃべって生徒はうわのそら
それじゃあちっとも
伸びてはいけない

神様でさえまちがう世の中
ましてこれから人間になろうと
しているぼくらがまちがったって
なにがおかしいあたりまえじゃない
か

うつむきうつむき
そうっとあげた手はじめてあげた手
先生がさした

どきりと胸が大きく鳴って
どっきどっきと体が燃えて
立ったとたんに忘れてしまった
なんだかぼそぼそしゃべったけれど
も
なにを言ったかちんぷんかんぷん
私はことりとすわってしまった

体がすうっとすずしくなって
ああ言やあよかった
こう言やあよかった　あとでいいこ
と浮んでくるのに

それでいいのだいくどもいくども
おんなじことをくりかえすうちに
それからだんだんどきりがやん
言いたいことが

言えてくるのだ
はじめからうまいこと
言えるはずないんだ
はじめから答えがあたるはずないん
だ

なんどもなんども言ってるうちに
まちがううちに
言いたいことの半分くらいは
どうやらこうやら言えてくるのだ
そうしてたまには答えもあたる

まちがいだらけのぼくらの教室
おそれちゃいけない
わらっちゃいけない
安心して手をあげろ
安心してまちがえや

まちがったってわらったり
ばかにしたりおこったり
そんなものはおりゃあせん

まちがったってだれかがよ
なおしてくれるし教えてくれる
困ったときには先生が
ない知恵しぼって教えるで
そんな教室作ろうやあ

おまえへんだと言われたって
あんたちがうと言われたって
そう思うだからしょうがない

だれかがかりにもわらったら

まちがうことが　なぜわるい
まちがってること　わかればよ
人が言おうが　言うまいが
おらあ自分で　あらためる
わからなけりゃあ　そのかわり
だれが言おうと　こづこうと
おらあ根性まげねぇだ

そんな教室　作ろうやあ

俳句

土田　裕

強東風やリュックの地図を出せぬま
ま
諸鳥の鳴き声忙し春の朝
時の疫の終わりが見えず春愁
名人の間の良き噺春の宵
燕来る住所は老人集会所

影山　武司

ピタゴラスの定理で近道春の朝
髪切りて証明写真春の風
朧夜や貨車の尾灯の滲みゆき
酒蒸しの呵呵と口開く鬼浅蜊
啓蟄や幾何証明のふいに解け
蛇穴を出づパレットに青をのせ
ふかふかと春日蓄へ畑の畝
転調の多き旋律春時雨
摩り切れし歌集の背文字春の雪
校庭の青空に伸び卒業子